

# こころやりの老

## 月影の巻

月かげのうたのこころ

余 韻

光明安心略圖……………一

報身の光明……………四

宗教所依の法體……………九

反 響

如来光明歎徳章要解……………一三

### 月かげのうたのこころ

聖典に如来の光明は遍く十方世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨て給はずとの文意を吾が宗祖明照大師は「月影の至らぬ里はなけれどながむる人の心にぞすむ」との道詠を以て宗教信心の消息を漏らし給へり。(斯の本の表紙の阿は此道詠の意を表はしたのであります) 此道詠は宗教の眞髓を包含しあれば深く汲み能く味ひて大宗教家の心情に倣ひて自己の信念を養ひ給へ。

道詠の意は中秋清宵澄々たる天に皎潔き月影は地上に照り渡る如く、宇宙心霊界の彌陀の心光は常恒に輝きて照らさぬ限もある

らねども唯信念ある人の心にも靈應は宿り給ふなれとの意である。

斯の道詠の「ながむる人の心にぞすむ」の「すむ」といふことに深意あることと存せられます。世の人々よ、宗教の眞髓を得んと欲せば此のすむと

眞意を求め給へ。元

至誠心を以て

教の眞髓たる心情と

向ふ時は

ことをのべ給ひしな

何人も動かす

佛する時は、凡夫の

れども、一心に念心も自づと澄み渡

るてふ義もあり。古人が淺ましき愚人悪人にも澄みたる月に我をなげうちて想を天に住ましむれば萬邪皆忘れて清きになる如く

一心に念佛して眞實天に照りたる如来の光明に自己の心情を投ずる時は佛心の光明に照らされて、凡夫の煩惱も自づと晴れ、いつしか菩薩心となるべしと。一心に念佛して自づと佛心と相應する時は、凡夫の心もやがて澄みて聖者と同じ心とはなるのである。

又念佛心には佛心と相念して離れざる義あり。月や我我や月かと別かぬまで想を如

起てよ起てよ

むれば、我が心念は

との如来の勅命の聲

あなたに在れども如

いかに聞ゆるや

中に入り給ふ。こゝ

佛を憶念すれば佛もまた憶念し給ふ、佛心と衆生心と親密の交渉

は彼此相離れざる最も親しき縁あるとの給へり。佛を念ずる人の心には如来の靈應常に宿り給ふ。

今此の圖は如来の光明に清められ如来が其心に在ますてふ人の心を表したのである。觀世音菩薩は彌陀の光明に靈化せられたる人即ち清められたる人の代表者である。觀音の寶冠に彌陀を戴けるは則ち常に彌陀を憶念して心に捨離せぬことを表示したのである。

然らば念佛して常に彌陀が其心に在ます時は即ち觀音の同胞である。されば觀經に念佛する者は人中の白蓮華なれば觀音勢至は常に勝友となり給ふと録されてある。

我宗祖明照大師は實に是れ活ける觀世音にして又大勢至であるされば其當時の人も形を見れば法然房、實を言はば彌陀如来と稱せられしにても知るべきである。彌陀を心に宿せる者は即ち觀音勢至といふべければなり。故に吾人は宗祖を活ける觀世音大勢至と仰ぎ奉る。宗祖は吾曹に模範を示し給へり。されば吾曹は宗祖が常に彌陀を念ぜし如くに、諸人も常に彌陀を念じ宗祖の中心に彌陀の在せし如くに彌陀吾が心情に在はすことを倣はんと欲するものである。

彌陀の光明に充たされたる心を表したる表紙の圖の如き心の生活に入らむと欲する諸賢は斯道を求め給へ。

(註一圖は觀音菩薩)

### 光明安心略圖 (註一階寫圖のみありて親筆なし)

- 1 宗教
- 2 安心(信仰の目的) 信條確定  
主義行法
- 3 信條(一) 所求——信仰につき救を求むる目的(現在未來)  
(二) 所歸——本尊阿彌陀如来と定む  
(三) 所行——救を受ける方法  
以上三決定せるが安心決定と云ふ。
- 4 宗教信仰
- 5 宗教の階級
- 6 二(低級) 宗教機教相應でなければ用をなさず  
一心に生命を賭せずば救の實なし
- 7 一(高級) 自然教(現世教)——自然を神と見る  
八百萬の神(水行、斷食、跣行)  
肉體の幸福を求む病氣平癒家内安全等の低級、  
二、超自然教(未來教)——報謝の念佛  
臨終の夕、來迎させ給ひ往生する
- 8 三、圓具教(光明主義)——圓滿具徳の教、實際に人生を救度する  
生活
- 9 暗黒生活——人の生れたまゝの生活、動物的目的にして活きんと欲するのみ  
光明生活——人の眞意義を自覺し永遠の生命として圓滿の極に向せん
- 10 極樂往生と光明生活  
其眞意義を會得して見れば同一である。極樂は別名を無量光明土と云ふ。阿彌陀如来の光明の實現の世界なり
- 11 光明生活
- 12 理想——光明により心靈復活し永恒の光明中に生活す(有餘涅槃)

實際——命終して無量光明の功徳莊嚴を實現する（無餘涅槃）  
9 光明生活中に多義あり。

今二義、最幸福——精神的に最高幸福を感じる（現、未）  
最高徳——精神的幸福と道德的人格向上する

10 本尊

現在未來に通じて絶待圓滿なる阿彌陀如來に歸依信賴して永遠の救を仰ぐ  
如來は最尊第一にして諸佛の光明の能く及ばざる處の御佛なり。

11 如來の在す處

經、佛の光明無量にして十方の國を照して障礙する處なし。故に阿彌陀と名く  
善導、彌陀の身と心とは法界に偏く衆生心想の中に映現す。

12 御旨

至心に我を「ミオヤ」と信じ、愛して光明中に生れんと欲せば必ず救はん。

13 念佛の意義三

請求——如來よ我は心暗く罪の凡夫必ず墮獄す。慈光中へ（救我、度我）  
感謝——永遠の救の恩寵を感謝し溢れて稱名の聲となる（體験）  
讚嘆——慈光にふれ、ば何とも云ひ知れぬ靈感にあひ、あゝと嘆ず。

14 念佛三昧

南無阿彌陀佛と云ふ衆生の一心に、自己の總てを如來の中に投歸するとき、阿彌陀佛不可思議の光明を以て衆生の心に満たしむ。暗黒なる衆生の心は如來の中に入り如來の心光は衆生の心の中に入り來り、暗黒と光明と合する時は暗黒は消えて明らかとなる。衆生罪惡暗黒の心は如來無量功徳の光明に靈化せらる。

## 報身の光明

無量光

十方一切諸佛神明の本佛にて、一切萬法を統攝し、一切萬徳の歸する處、正覺の光徧く十方を照らして衆生を佛化し給ふ。

無邊光

大圓鏡智——如來鏡智光にて衆生の無明照破せられ、十方三世一切の依正色心悉く現前す

平等性智——我等が吾他分別の迷を照破し、各自の自性は本來清淨にして諸佛同一平等なりと自覺せしむ。

妙觀察智——如來我に入り我れ如來に入りまた如來の三輪は自ら我等が三業に涉入し、迷の意識を轉じて一切種智を與ふ。

成所作智——汚心より五根も汚れ、不淨の五塵界を感ず。若し此智に同化せらるれば佛眼乃至佛身となり相好國土を實感す。

無礙光

神聖——道德の原則となり、又至善の標準となり、我等の行道を明かし行爲の正智見を與へ給ふ。

正義

我等が邪と惡とを捨て正と善とを選びて向上せしむる勢力を與へ給ふ。

恩寵

慈母として一切を愛し佛性卵を化し我等佛子を靈育し長養し給ふ。

無對光

正覺——無明を變じて正覺の光とす。  
涅槃——生死を轉じて涅槃の常樂とす。  
如來——絶待、無限、眞、善、美等  
衆生——有限、生死、偽惡、暗黒等  
炎王光  
（見思塵沙無明）之により活きられぬ煩惱が業を作り業より苦報を受く。念佛して煩惱

を脱却す

清淨光

吾等の感覺を淨化する。即ち自己靈性八面玲瓏として身心皎潔となる。天地新しく靈口麗し。

歡喜光

苦を抜き樂を興へ給ふ、身は娑婆に神は極樂に、形は憂世に靈は彌陀と共に在り。

智慧光

迷を轉じて悟を開かしむ。正智見開けて佛身及び佛士を知見し、佛智佛徳をも悟入する。

不斷光

惡をやめ善に進ましめ、罪惡我が轉して靈我となり、暗黒より光明生活に入る。靈的活動の原動力となる。

難思光

信心喚起の位

自修——自ら一心念佛して信心の「あけ」となる。

相續——師友の心力感傳にて信心喚起せらる。

無稱光

信心開發の位

業障深重なる我は如來の光明に依つて更生らざれば浮ぶ瀬なしと思へば奮つて稱ふべし。

七覺支 1 擇法 2 精進 3 喜 4 輕安 5 定 6 捨 7 念

超日月光

光明體 現の位

光明の人として智慧と慈悲との思籠を被り、聖意を受けたる意志として、靈的活

動を成すべきで、如來の聖意を吾心として、これを實行に顯はす。これ靈的光明生活である。

### 宗教所依の法體をかく名く

一、法身、如來藏性、ビルシヤナ、大日(金胎一體)アミダ、眞神等(宗教的名詞)

二、眞如、法性、涅槃、第一義、眞理、妙法等(學術的名詞)

總——阿彌陀(三身一如の總稱なり) 時間に無量壽、空間に無量光、即ち絶待心靈態の稱なり。

別——十二名稱

初二 無量光——體——法身

無邊光——相——般若

無礙光——用——解脫

無對光——如來自境界

終局目的歸趣——眞佛土即涅槃

炎王光——消極——解脫の要——人の煩惱

積極——解脫の能——佛性開發

宗教心理、如來の靈に依て成じたる心理狀態

清淨光——四面玲瓏——感覺

六根清淨——感覺

歡喜光——融合——感情

安立——感情

智慧光——啓示——智力

不斷光——靈化——意志

宗教倫理——行儀分

難思光——恩寵喚起——信仰修養

無稱光——同開發——同開發

超日月光——同靈化——同實行

- 一、大圓鏡智——絕對觀念態
- 二、平等性智——理性態
- 三、妙觀察智——智力態

四、威所作智——宇宙一切感覺となるべき作用  
 喚起位——五根五力——信、進、念、定、慧

七覺支心靈の花開く心意状態（開發位）

- 1 擇法——如來心を探んで（）虚偽雜念を取らず
  - 2 精進——勇猛に念佛三昧發得佛を見んと欲して止まず
  - 3 喜——微かに如來靈に接觸して三昧の喜を感ず
  - 4 輕安——諸雜念なく無我の境に入り身心輕安を覺ふ
  - 5 定——無我定中佛心と合一して三昧定樂を覺ふ。
  - 6 捨——初に注意怠るとき佛現前せず三昧純熟すれば任運に現前す
  - 7 念——自己の中心が彌陀なれば彌陀より流出する念々悉く佛心と相應、こゝに於て三昧發得し心靈開發して佛知見開示、入我々入の妙境に心機革新して新人眞佛子と爲る。
- 八正道分——三昧結果（體現位）
- 一、正見——已に佛知見開き如來の聖意を我意となす故に、自ら向ふ處佛行にて向上の一路なり。
  - 二、正思——正見の心眼を本として思惟する處すべて思想佛心と相應す。
  - 三、正語——聖意を心と爲す思想より發表する言語なれば悉く佛意と相應す。
  - 四、正業——思想言語共に佛心たり其身の動作行住坐臥に作す處佛行と相應す。
  - 五、正命——身心の生活悉く佛心佛行、衣食住共に佛の中にあり。
  - 六、正精進——勇猛に奮闘する處佛行ならざるなし
  - 七、正念——八憶念々悉く佛心と相應す。
  - 八、正定——佛心と合一して常に佛子の行念々に向上し歩々に往進す。

かのみほとけのみ光りは、あきらけくして、あらゆる處にきこへぬこともなかりけり。しかれば、ひとり我れいまそのみ光りを稱へ奉つるのみならず、あらゆるもろもろのみほとけも、さとりびとも、もろ／＼のぼさつたちも、ことごとくともにほめたゝへざるものなかりけり。

若し人ありて、そのみ光りと、みるづと、みちからとをきゝたてまつりて、日々夜々にまご／＼をさゝげて、みすくひをいのり奉つり、心にかけてたへざれば、そのころのねがふごとくに、そのくにに生まるゝことをえて、もろ／＼のぼさつ、およびさとりびとたちのために、ともにほめたゝへられて、そのいさほしをたゝへられん。そのしかるのち、みほとけのみちをさとり得るときは、あまねくもろ／＼のみほとけ及びぼさつがたに、そのみ光りをほめたゝへられんこと、またいまのみほとけの如くならん。

ほとけの曰はく、われあみだほとけのみ光りとみるづのいとたかく、ことにすぐれましますことをとかとせば、この世をつくしても、なほいまだつくすこと能はざるべし。

斯光に感合ふものは

心の三の垢も消滅し

身も意も溫和となりて

平和と歡喜に充され

聖の善き心と

生れ更らん

## 如來光明歎德章要解

如來は宇宙の生命なり。聖旨に歸命ふものは永恒の生命とならん。

如來は宇宙の光明なり。聖龍を光被るものは聖き靈とならん。

六大本ピルの身心なりと識るときは、宇宙の無限なる即ち如來の法身なり。然らば即ち宇宙は外面より觀する時は蒼々たる天地唯物の存在の如くなるも、内は即ち心靈に充滿せ玉ふものと云はん。天地萬物に秩序あり條理あるは全知の作用にて一切の運轉活動は全能の功用にまします。

全知全能即ち如來の光明なり。(若し威力と光明とを分ときは威力を全能とし光明を全知とすべし。今は總てを光明とす。斯光は天則秩序の理法としました原動力として一切萬物を産出し活動せしむ。若し宇宙に斯光なからんか、人に精神なきと同じく盲目的死物的秩序もなく活動もなかるべし。然るに萬物に秩序あり運動あるを見る時は、誰か此性能の存在を否定することを得ん。斯光天則の理法として萬物を開發するのみにあらず、進んでは一切の生命を向上し、聖き靈と成し、終局的目的なる涅槃に攝取し玉ふ理性存せり。ネハンとは永恒不變なる常世の靈界。彼處の萬物は光明常に輝き、唯光榮と靈福に充たる處なり。聖典に示せる法藏の本願十劫正覺の方便法身は此目的の光として示現し給ひしなり。三世の佛陀は此目的の光を衆生に教へんが爲に出でたまへり。神靈不測奇異絶驚べきものは宇宙一大靈力なり。斯光明なり。この光天地に先だち萬物に超えて、始もなく終もなく、永恒本然にして、内に非ず外に非ず、何の時何の處にも存在して不思議の靈能を現はし玉へり。

例へば太陽の能力に光と熱と化合との三線ありて地上の萬物を化育すと同じく、如來の心光には智慧と慈悲と神聖との三靈能ましく、人の知情意に對して明慧と平和と正善とに靈化し玉ふ徳まします。

嗚呼烈哉靈光の及ばす處、各其類に隨ふて化を被らざるなし。三惡劇烈の炎は清凉

の風と變じ、天人垢汚の服を浴きて聖靈の衣と化し、二乘見思の闇晴て真空の月朗かに、菩薩智慧の日月は自他を雙へて照し、佛陀果滿の園には正覺の華開けり。されば一切の佛陀は斯光に依て一切智を證し、一切の聖者は斯光をもて永恒の命を得給へり。教祖釋迦牟尼ガヤの道場に於て正覺を證せし、イエスキリスト、ヨルダンに於て聖靈を感じたる、同じく此永恒の靈光に接したるに外ならず。

有る人が自己心中に在ます神は外萬物の中に存して光を放つと言ふが如く、此靈光自然界中に存在す、種々の相をもて衆生の爲に應現す。即ち聖典に明す處の觀音の三十三身、不動の忿怒、乃至塵數の示現身、皆是宇宙に遍在せる靈力の發現なり。自然萬物の中に活躍したる靈光は機能團體たる人格に在つて聖的活動をなせり。即ち龍樹天親、ソクラテース、マホメット、智者、善導、空海、源空の如き靈界の偉人皆此光の人格として現じたるものと言つべし。

宇宙悠遠か此光の如き不思議なるあらん。茲に因て一切の佛陀は咨嗟して讚嘆し、諸の聖者は絶號して稱揚する處に所以あり。

諸の賢者よ、願くば我ら一切諸佛の讚稱し給ふ終局目的の光を信じ、如來の聖旨に歸命し、無明の眠覺め、罪と苦より救靈れ、共に聖き心となりて、同じく彌陀ネハン界に生じ、正覺の華開きて、三身一如の妙果を結ばんことを。

### 第一節 如來の聖德

「無量壽如來」最尊第一の五句は總標して宗を擧ぐ。如來は宇宙萬有に對して最尊たるに三義あり。

- 一、如來は絶對的最上者萬有に超勝せる獨一神尊。
  - 一、如來は一切萬物を統攝し諸佛神明を統一せる大威力者。
  - 三、如來は一切の生命を向上し終局目的なるネハンに攝取し給ふ大光明者。
- 譬へば自我が人の精神及び身體を支配する如く、帝王が一國の人民を統御する如く、

天體に太陽が諸の星宿の中心たる如く、如來は宇宙萬有を統攝し一切佛陀天神の最勝尊なり故に威神光明最尊第一なりとす。

是故に無量壽佛の下別して名を列ねて聖徳を表はす。聖徳無邊。十二の徳名を以て其性能を顯はすに悉く盡ざるなし。

無量光（法身。體大。處として實在せざるなし。）此下三光は如來の體相用の三大として宇宙に遍在せる性能なる事を明す。法身は宇宙の實體、一切佛陀の本地、諸天神明を統一せる尊體也。斯如來心體を體得するものは即ち正覺を成す。

無邊光（一切慧。處として照さざるなし。）如來四智圓明の大慧光は遍く法界を照し、衆生の知見を啓示して無上菩提を證らしむ。

無礙光（解脱の用。處として化せざるなし。）如來の靈力は、神聖、正義、恩寵の徳をもて衆生肉我の束縛を解きて大我の中に靈的自由を與へ、大ネハンを得せしむ。

無對光。上の三光の力によりて救生れたるもの、終局に歸する處、上菩提の華開きし大ネハンの都、眞善美の靈界、諸佛聖者の證入する境、常寂光土又は蓮華藏界の名をもて表せらる。諸佛こゝに至りてマダの本覺に還り、衆生此に歸して無上の果位とす。一切に超絶す故に無對光と名く。

炎王光、世の衆生の惡質を滅殺する光用。衆生に生靈を覆ふ所の惡質存す。即ち惑業苦の三障是なり。惑とは罪惡の要素即ち煩能なり。人此煩能に因て惡業を作す。業困あれば必ず苦毒の果を受く。斯光よく此三障を撲滅すること恰も火炎のよく諸々の不淨物を焚盡すが如し。故に例をもて炎王と名く。

清淨光（人の感覺を美化す）此下四光は人の心理に被むる處の光。衆生の眼耳鼻舌身の五官が外界の色聲香味觸の五塵の爲めに染汚さる。然るに斯光に美化せらるる感性は四面玲瓏靈香積郁五根清淨にして外塵の爲に惹れず。例へば蓮花の汚泥より出でて而も染著せざるが如し。

歡喜光（人の感情を融化す）肉我の感情は諸々の苦毒と罪惡とに充さる。若し此光

に融化せる眞情は平和と歡喜とは如來の泉より湧き、自然の妙樂は天地と共に盡ることなく、心廣く體肝かに、人生の靈福こゝに於て極みとす。

智慧光（知力に對して知見を與ふ）人の知力は無明にして自ら眞理を悟る能はず。斯衆生に佛知見を與へ神祕の内面を啓示す。即ち如來の相好光明莊嚴淨土の相、また内包の徳たる慈悲、智慧、等の聖相、乃至眞法身に至るまでを知見せしむ。又一切の三昧智慧神通等は悉く皆斯光より與へられむ。

不斷光（人の意志を靈化する）人の肉我の意志は我意利己主義にして俗情非靈態なり然るに斯光に靈化せらるゝ時は聖靈態、高等なる道德意志と成りて向上的には聖意の指導に隨ひ、また自他平等の愛をもて二利を圓滿にす。

難思光（信心喚起の位）此下三光は人の修行の三階に對する如來の光。如來の靈光玄妙甚深、初心の輩が能く測るべきに非ず、初心は唯一ら不思議の神光を仰信し、斯光に接せんが爲に三心五行をもて恩寵の喚起を期す。

無稱光（心靈開發の位）若し人三心五行をもて信念を修養し、如來の光に接し心靈開發する時、即ち如來の聖相を知見し、また法忍を證る。然るに其自證の妙味は言語をもて發表すること能はず故に無稱と爲す。

超日月光（聖旨體現の位）己に心光に感じ、意志靈化し、己れは即ち如來の聖旨を體し、而して行爲と言語と思想とに於て靈的行爲を實際に爲すべき位なり。

「其衆生有りて」の下光、明十界を攝す。如來不可思議の光明は遍く法界を照して凡聖咸く其益を被むる。初に天人を益す。衆生の三垢とは貪欲瞋惡愚痴の三毒、よく人の心意を垢汚すが故に名づく。また三垢とは人の知情意の三能を汚す處の惡質なり。即ち知力の垢たる無明と惡知を除きて眞理を明かにし、心情の垢たる苦惱及び忿恨等の煩惱を除きて而も平和と歡喜なる心情と意思意志の垢たる我意薄弱の意を矯め、高尚なる理想と遠大なる希望をもて向上的に進行すべき道德的行爲をなさしむ。故に「斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔

輾に歡喜勇躍して善心生ぜん」と。

「若三塗勤苦」の下は、三惡道の爲に拔苦與樂の益を明す。「三塗」とは地獄餓鬼畜生の三惡道を云ふ。若し衆生斯光に背き、邪惡殘害、極重の惡を造る者は、地獄に墮すべき性格なり。嫉妬慳貪を本とし、肉慾我慾、中品の惡を作すものは餓鬼道の業なり。愚痴弊惡にして橫的情操、下品の惡業は即ち畜生の類比なり。視よ、世に形に於てこそ人類に相似たれ、其情操と行爲をもて判斷を下す時は、餓鬼道畜生道炳然たるにあらずや。斯る惡道に墮すべき性格なる惡人と雖も、斯光眞理に照され、全く既往の罪惡を自覺し、悔ひ改ためて聖旨に歸命する時は便ち救はれむ。いかにとなれば、大なる慈悲の光は千年の間室をも忽ちに照破すべければなり。故に三塗勤苦の衆生も斯光に遇ふ時は即ち解脱を得んと。

「無量壽佛光明顯赫」の下は、四聖同化を明す。聲聞緣覺の二乘は自利の小聖、甲は四諦の理を觀じ、乙は十二因縁の法を緣じ、共に見思の煩惱を斷じ、真空無我の理を悟り、同じくネハンの妙果を期す。斯二聖は此光の消極の方面なる真空のみを證得て已に解脱せりと謂ひ、積極の方面は未だ曾て識らざる所なり。

菩薩は覺有情とて、即ち斯光に由て靈的生活をなす聖者なり。斯光の萬德豐備を自己の理想とし、聖旨を實現する爲に益向上し、下は一切衆生を自己と同じく光の生活とし、自他平等の利益を期するの菩薩と爲す。

佛陀は三身具に證り、四智圓かに照し、斯光と全く一致し、肉我の缺點悉く盡き斯光と體を一にし、斯光の能力をもて自己の力とし、清淨法身は常にネハン界に安住し、外は身を百億に分ちて衆生を度す之を佛陀と爲す。

靈異絶妙不可思議なる光明。一切諸佛は斯光に依て正覺を成し、一切の聖者は斯光に由て聖靈と化す。斯光の恩德廣大なり。故に共に其靈能を讚稱して止まず。

## 第二節 修行信心分 (如來光明を獲得する修行三階あり)

### 喚起 開發 體現

「若衆生有」の四句は心光の喚起と開發を明す。其光明威神功德を聞とは是如來の恩寵を獲得すべき信念の要素なり。上の如き光明の眞理を聞き、之が信念の動機となりて、宗教衝動として如來に信がれ、歸命信賴の心意益發達して心光を被り信念を喚起す。

信念修養に三要法あり。三心、四修、五聖行、是なり。

「至心に三心あり、聖意に相應べき心の三徳」一、至心に自己の罪惡を自覺り、専ら如來の恩寵を信認む。二、感情に於てはすべてに超て如來を愛慕し至心に憶念して止まず。三、靈國に生じ聖き世嗣とならんことを欲す。

「不斷」に四修あり。一、如來に對して無上の尊敬を捧げて。二、一行三昧に専ら如來を念じて餘想を雜へず。三、聖意を體信し相續して斷せず。四、聖意を體得して終身中止せず。

「稱説」に五聖行あり。一、救世の福音なる聖典をよみ如來の聖德及び淨土莊嚴等を識り以て信念を修養す。二、懺悔と感謝の誠心を表せる朝夕等の拜禮をもて信念を修養す。三、如來の好相淨土莊嚴の相及如來の智慧聖德を知見せんか爲に冥想觀念もて修養す。四、一心に聖名を稱へ聖旨の現はれを祈り、恩徳感謝をして信念を修養す。五、聖歌をもて聖德を讚頌し、また香華珍膳等の供をもて而も修養す。

斯三要法の中、初の三心は如來の靈應を感じ心光を獲得すべき人の心意にて。四修は信念を鞏固にし完全ならしむる方法。五行は信念修養の材料なり。修養の宗とする處は自己の心意と如來の恩寵との投合にあり。即ち自己を如來の光明に投歸没入し肉我に死し靈我に復活するにあり。要する處若しくは口稱、若しくは憶念、一行三昧をもて一に如來に心意を注ぎ、心々相續して止ざる時は、若しくは頓速に若しくは漸次に如來の心光と感合し、恩寵喚起の機熟し、信心覺醒し心靈の曙となりぬべし。之を恩寵の喚起と爲す。

開發。上の三心五行によりて信心覺醒し、如來の心光をもて自己を返照する時は、己が罪惡を自覺し、道心の苦悶を感じ、尙進んで心靈の開發を期する時、心光内に薫じ恩寵の和氣を感じ、七覺心の華開き、妙感靈應の神機、四面玲瓏歡天喜地、身心融液不可思議、其内容の眞味は言語道斷に念慮の絶たる處、こゝに於て全く肉我の罪より脱て靈我の生命とし、心機一轉たるに及びて即ち人格の革新なり、之を精神の更生とす。經に「心の所願に隨て其國に生ず」と。

體現。信仰の結果。恩寵開發の目的は心光を體現すべき實行にあり。「其國に生」とは往生即ち更生なり。此に二位あり。精神と及び身體なり。精神の更生とは従前の肉我を轉じて眞我の生命と化り、情操一變する處、便ち新しき人となる。光明界裡の者として昨日の我と異なる觀あり。有餘の依身は變らねど神は淨土に棲遊ぶ。聖懷の中に安立する眞情は毀譽八風の爲に動搖されず。既に精神更生し去て現世界を觀じ來る時は、昨日のそれと異れり。曾て蔑視したる如き厭穢の魔郷にあらで、是よりは彌向上し目的なる眞理の靈界に進むべき菩薩が天職を果すべき方便修行士なりし。

斯光吾人を自覺せしむるに人生の眞理を以てす。然り而して吾人はいかに聖意を體現せん。いな光榮を現はすべき行動せん。曰く、吾人は聖子たる靈我實現の爲にあらゆる力を竭すべきにあり。即ち理想の觀音として我と他とを同一視し。他の苦は即ち己が苦なり、己が樂を以て他に分たんと欲す。正義の意志は勢至と同ふし、即ち己を尅め己を憐て聖意の現はれにつとめ。己が分を守り他人の福祉を保護し、又眞勇沈毅いかなることに望みても屈せず捨ます、また吾人は不動の智劍を執りて己が貪瞋痴を害し。地蔵の愛に倣ひて世の人に待せん。高尚なる理想を文珠の聖童に習ひ、遠大なる希望を普賢の行願に學び。向上進趣、萬善萬行をもて此土に樂邦を實現さん。惡人の迫害は心靈を研くの利器。一切の誘惑は尅己忍耐の試檢具、若し現世界を以て目的ある階梯なる修行土と觀じ來る時は、菩薩六度萬行を修すべき諸の器具が全備に非ずや。經に此土一日の修行は淨土に於て百歳するに勝れりと。吾人は斯る大

利なる此土なることを自覺するが故に、寸陰を寶とし己に本務を竭さんとすべく、然り而して方便土のつとめを全く卒る日には、必ず目的たる實在の報土、即ち無餘涅槃界に歸る期あるを信す。經に「其國に生じ諸の菩薩聲聞大衆と共に嘆譽して其功德を稱せられ」とは蓋し精神更生し已て聖旨實現の爲に活動せる人な稱するなり。身體の更生。已に更生したる精神は如來大心中に理想の淨土に逍遙ぶもの、肉の有らん限りは自然の約束を全く脱する能はず。彌方便の業を卒る曉には、無明生死の夢醒て大ネハン城にて無上菩提の宮に住し、眞善妙美の園には常樂我淨の華鮮かに四智圓滿の日は明けく、三身一如の月清らかなり。然るときは即ち體は本覺の都に在て化を百億に分ち、こゝに於て一切諸佛は即ち本覺の彌陀。彌陀即一切諸佛たるの眞理は自ら證らん。

### 修養のすゝめ

諸賢よ心靈修養の要に祈禱拜禮、念佛三昧、坐禪工夫等あり是らの方法により如來の光明を獲得し聖き人となり善き生活に至るを目的とす。禪の大悟見性他力門の信心開發、キリスト教の精靈に感じたりと曰ひ名を異にすれども歸する處此大光明に接するに外ならず斯光を感得して初めていける信仰に入たるものとすされば求めよ眞理の光明を。

(終)

昭和八年二月二十五日 印刷  
昭和八年二月二十八日 發行